

女性芸能人専用特別監獄 その2

医務官の沢田祐樹の手はローションをまとい、変わらず上野歩夢の乳房の上を滑らかに踊りつづけ、その手と指の動きに合わせて上野の大きな乳房は、されるがままに形を変えている。その様を、すぐそばで刑務官の古山優美がじつくりと見つめつつ、関西弁で上野を追い込む。

「あーあー、大女優さんのおっきなおっぱいがグニュグニュにされとるやん…」

「うう…」

「前から思ってたけど、上野さんて童顔やのにほんまに胸大きいなあ」

「ほっといてよ…」

「ほっとかれへんて。先生はもう上野さんのおっぱいにご執心や」

「おっぱいもいいけど、乳首もいいよー」

沢田の指が上野の乳首を転がしてやまない。

「先生はほんまに乳首好きやなあ」

「も、もうそこは…」

「え？そこってどこ？どこなん？」

上野のつぶやきに古山が即座に反応する。

「乳首？乳首の先の方？」

「…さ、さっきからそこばかりじゃないの…」

「先生、乳首やって！上野さんのご希望は乳首の先の方！」

「分かってるって」

「う…うう…ふう…」

上野は、細く息をついて快感を逃そうとする。しかし、自身の乳房を絶え間なく揉みしだかれ、性感の超高感度センサーと化した乳首を転がされて、その先端を指の腹で撫でられるたび、その小さな肩をブルッと震わせてしまう